

ことばの波止場

NINJAL Research Digest

vol.5
2019.3



特集

言語変異と言語変化

- ・日本各地の地域言語を保存し、言語の多様性を維持する
- ・ここまでできた! 『日本語歴史コーパス』とその活用



コラム 日本語文法って楽しくない? 不思議クナイ? 茂木俊伸

研究者紹介 横山詔一 新永悠人

著書紹介



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

NINJAL

昔は美人をクールクと言ったそうだ。
その中で一番の、カンナマルクールクという、思わず
驚かすほどの美しい少女が仲筋のカンカヤー
に生まれた。
言語変異と言語変化

PROJECT

「いま何もしなければ」 なくなってしまう

日本各地の地域言語を保存し、 言語の多様性を維持する

～日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成～

木部暢子・山田真寛

KIBE Nobuko

YAMADA Masahiro



多良間語民話絵本『カンナマル クールク』

言語の記録保存と継承保存

世界の言語の約半分が「いま何もしなければ」今世紀中になくなってしまおうと言われており、例えばユネスコは、そのような消滅危機言語が日本には8つあると報告しています。この報告に含まれないほぼすべての地域言語（中央語である日本語標準語以外の言語・方言）も、だんだんと使う人がなくなって、消滅の危機に瀕していると言えます。言語変異研究領域では、このような日本各地の地域言語を保存するための研究を行っています。

言語の「保存」と聞いて、みなさんはどんなことを想像するでしょうか。私たちがおこなっている二つの「保存」についてお話しします。

言語の記録保存

最初に思いつく方が多そうなのは、言



聞き取り調査

語の「記録保存」の方でしょうか。博物館に言語の記録資料を残すイメージです。私たちは、消滅の危機に瀕している言語の話者が健在なうちに、体系的かつ総合的な言語の記録を残す研究を、日本国内40地点で行っています。

体系的な言語の記録を残すために、まずその言語の全体像—その言語が持つ音、語や句・文をつくるための文法規則、句や文が実際の文脈の中でどのように解釈されるのか、といった体系的な記述が記載される参照文法を書くための調査を行います。

また、言語の全体像を理解するためには、総合的な言語の記録が必要です。参照文法と合わせて、例文や音声資料付きの辞書、音声や映像資料から文字化され逐語訳が付された談話資料、さらに最近では詳細な文法情報を付したコーパスも総合的な言語の記録に含まれます。

言語が消滅してしまったり、世代間継承が途絶えてしまったりしていても、このような記録があれば復活・復興させることが可能であることは、ヘブライ語やハワイ語などの例からもわかり

ます。逆に、質・量ともにじゅうぶんな言語の記録がなければ、一度失われた言語は二度と知ることができず、次にお話しするもう一つの保存も非常に困難になります。

言語の継承保存

私たちは、言語の「記録保存」と並行して、「継承保存」のための実践研究も行っています。生きた言語は人間の頭の中にあり、個人の寿命を超えて次世代に継承されていくものなので、博物館に言語の記録が残るだけでは、生きた言語を残すことはできません。

日本国内の消滅危機言語、例えば琉球諸語はおおむね、60歳以上の人たちが日常的に話していますが、学齢期の子どもたちは話すことも聞いて理解することもできず、世代間継承が断絶していると考えられます。このような消滅危機言語の「継承保存」とは、世代間継承を再開させ維持することを意味します。



たくさんの「潜在話者」がいる

消滅危機言語の流暢な母語話者世代と、標準語モノリンガルの子どもの世代の間に、「流暢には話せないけれど聞いて理解できる」世代がいることは、これまでほとんど注目されてきませんでした。

しかし、例えば沖永良部島の40歳前後の人たちは、地域言語の理解に必要な言語知識を流暢な母語話者と同じように持っていることがわかりました（下のグラフ参照）。彼らを地域言語がまったくわからない人たちよりも少ない労力で（再び）地域言語を話すようになる「潜在話者」と呼ぶことができます。潜在話者の多くは、言語獲得期にあ



地域言語絵本のワークショップに参加した親子

る子どもを育てている「親の世代」であり、彼らの地域言語使用の増加は、子どもたちが聞く地域言語量の増加につながると考えられます。私たちは、潜在話者の地域言語使用を増やすことができれば、世代間継承を再開させられると考えています。

地域言語復興の課題

どうすれば潜在話者の地域言語使用を増やすことができるのでしょうか。流暢な母語話者が健在なうちに、言語の継保存だけでなく、記録保存も並行して進めなければいけません。また消滅危機言語の復興は、地域言語コミュニティの一人ひとりが取り組まなくては達成できません。

日本語標準語が支配的な現在、価値観や文化の多様性、心の豊かさの支えとなっている地域言語の価値は、中央・地方ともにじゅうぶん認められているとは言えず、「今さら方言なんか役に立たない」と考える人もいるかもしれません。そのため、地域言語コミュニティ内においても、地域言語を使用する内発的な動機づけが必要です。

これらを解決するために私たちが地域言語コミュニティと協働して行っている取り組みを一つ紹介します。

地域言語コンテンツの制作

言語の記録として収集している談話資料には、地域に伝わる昔話や、地域の人の創作物語があります（一部は kikigengo.ninjal.ac.jp で、音声付きで公開されています）。私たちはこれらの談話資料を利用して地域言語の絵本を制作し、地域言語の記録を蓄積しつつ、その一部を継保存に利用しています。

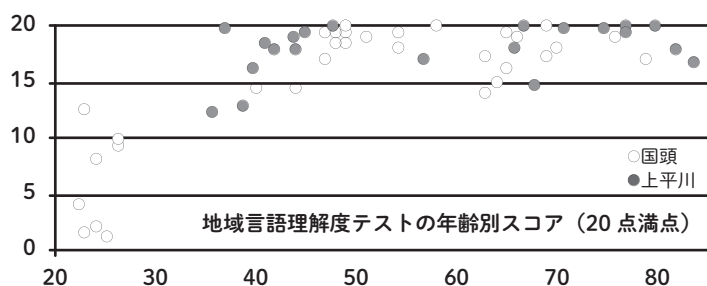
地域言語の絵本は、多くの潜在話者が含まれる「親の世代」が、子どもへの読み聞かせに利用しているほか、これをモチベーションにして、地域言語の習得・練習にも利用しています。絵本の付録に付く朗読音声とことばの解説は、フィールド調査によってデータを収集し学術論文として執筆したものなどをもとに、地域言語コミュニティが利用できるかたちにして制作しています。

この例のように、言語の記録を利用した地域言語コンテンツをとおして楽しみながら地域言語を（再）習得することで、一人ひとりが地域言語の復興に取り組み、結果的に社会の中と個人の中の言語の多様性が保全された豊かな社会を維持していけるような研究を、私たちは行っています。

（言語変異研究領域・准教授／山田真寛）

地域言語の世代間継承度を客観的に測定する

沖永良部島の二つの集落（鹿児島県大島郡知名町上平川、和泊町^{くにがみ}国頭）において、それぞれの集落のことばで理解度テストをつくり、日常的に地域言語を使用している世代と、その地域で生まれ育った比較的若い世代を対象に、理解度を測定する実験を行いました。その結果、これまで「流暢な母語話者ではない」とされてきた40歳前後の人たちも、日常的に地域言語を使用している世代と同じように地域言語を理解できることが明らかになりました。また20代の理解度は個人差が大きく、地域言語をある程度理解できる人からほとんど理解できない人までいることもわかりました。



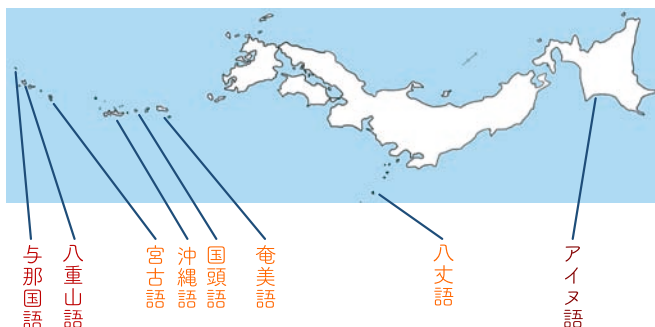
与那国語絵本『ディラプティ』

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）は2009年に“Atlas of the World's Languages in Danger”（『世界消滅危機言語地図』）を発表しました。世界で約2,500の言語が消滅の危機にさらされているという発表です。日本で話されている言語のうち8つの言語—北海道のアイヌ語、沖縄県の与那国語、八重山語、宮古語、沖縄語、国頭語、鹿児島県の奄美語、東京都の八丈語がその中に含まれています（図①）。

この背景には、世界中で先住民が迫害されたり差別されたりして、人権が脅かされている、その人権を守ろうという国際連合の決定がありました。1982年に国連に先住民作業部会が作られ、93年には「国際先住民年」が、1995～2004年には「世界の先住民の国際10年」が制定されています。これを受けてユネスコは、2001年に「文化の多様性を尊重する宣言」を採択し、2003年に危機言語部門を立ち上げ、2009年の『世界消滅危機言語地図』の発表となったのです。

日本では

日本では1970年ごろまで「方言を使わないようにしよう」という教育が行われました。沖縄県や鹿児島県には、方言札というものがあって、学校で方言を使うとこれを首から下げさせられることがありました（写真①）。



重大な危険

危険

極めて深刻

図① 日本の危機言語・方言（ユネスコ2009をもとに作成）

そこまでしなくても、「方言を使わないように」という教育は各地で行われました。このため、この時期に学校教育を受けた人たちは、方言に対してあまりよい感情を持っていません。最近では多少、「方言は大事だ」という意識へ変わってきているようですが、それでもまだ「方言よりも標準語の方がいい」、「方言は必要ない」と考えている人はたくさんいます。

このような歴史とテレビの普及や人口の都市への集中といった生活の変化が重なって、いまユネスコの発表にある8つの言語だけでなく、各地の言語・方言が消滅の危機に瀕しています。

地域の言語を守る理由

では、地域の言語を守る理由はどこにあるのでしょうか。これについてよく言われるのは、次のようなことです。

(1)言語は地域の環境や文化・社会の中で、長い年月をかけて作られてきた。テプファー国連環境計画（UNEP）事務局長のことばを借りれば、「伝統、文化の継承を支えてきたことばを失うことは、自然の貴重な教科書を失うことに等しい」（2001年UNEP閣僚級環境フォーラム、ナイロビでの発言）。

(2)言語はアイデンティティ（自分が自分であること）の象徴である。言語は人々の間に連帯意識をもたらし、コミュニティのまとまりを強くする。

(3)言語には、コミュニケーションツール（道具）としての役割と知識や思考、感情・感性の基盤としての役割がある。人は言語によって世界を認識し、さまざまな思考を行い、



写真① 沖縄の方言札

感情や感性を働かせている。その仕組みの多くは、まだ解明されていない。多くの言語や方言がなくなるということは、言語の仕組みを解明する手がかりの多くが失われてしまうことを意味する。

(1)と(2)については、説明の必要はないと思います。ただ、(2)については注意が必要です。なぜなら、(2)は逆にいうと、その言語を使わない人を排除することに繋がるからです。人々を結びつけると同時にそれ以外の人を排除する、諸刃の剣であることを自覚しておく必要があります。

(3)は少し説明が必要かもしれません。言語をコミュニケーションツールとして捉えるならば、じつは言語は1つの方が効率的です。日本における1970年ごろまでの方言禁止教育は、子どもたちが仕事で都会へ出て行ったときに、きちんとコミュニケーションがとれるようにという配慮のもと、方言よりも標準語を優先させた結果です。

一方、知識や思考、感情・感性の基盤としての言語は、多様な方がいい。これについて考えるために、次のような想像をしてみましょう。

1つの言語しかない世界

もし、1つの言語しかない世界になったら、どうなことが起きるでしょう。だれとでもコミュニケーション

ンができて便利です。人々は1つの言語だけを学ばいいので、楽かもしれません。しかし、どこへ行っても同じ言語しか聞こえてこない世界が果たして豊かでしょうか？

人は他人と違うことによって、自分はどうなのだろうと考えます。「蜜柑」のことを奄美や沖縄でクニブと言いますが、「どうしてクニブなのだろう」と考えることにより知的好奇心が刺激され、知識の蓄積へと繋がっていきます。このような世界こそ、豊かな世界ではありませんか？

もちろん、コミュニケーションツールとしての標準語も必要です。言語を2つ覚えるのは負担だと思われるかもしれませんが、そんなことはありません。現に、沖縄のお年寄りたちは、立派なバイリンガルです。むしろ若い人たちの世代でモノリンガル化が進んでいます。とてももったいない話です。

モバイル型の言語展示

言語の多様性をできるだけ分かりやすい形で知ってもらうために、私たちはモバイル型の言語展示ユニットを作り、展示をしています。モバイル型展示ユニットの基本的な考え方は、次の3つです。(1)どこにでも持って行ける、(2)見るだけでなく、触ったりシールを貼ったりして見学者も展示に参加する、(3)一度作って終わりではなく、常に改

良してよりよい展示作品を作る。

最初に作ったのが「方言の世界」です(写真②)。日本の方言の入門編で、方言のバリエーションがいかに豊かであるかを「カタツムリ」や「凧」、「とんぼ」、「霜焼け」などの方言地図を使って説明しています。このユニットでは、「絆創膏」

を何と言うか、バンソーコー、サビオ、カットバン、リバテープなどから選んでもらい、シールを貼ることによってみんなで方言地図を作るという参加型パネルを準備しています。

次に作ったのが「沖縄のことばと文化」です(写真③)。沖縄のことばというと大変、難しいように思われがちですが、じつは、共通語と首里方言との間にはきれいな発音の対応関係があります。そこでまず、共通語の「ま」「み」「む」「め」「も」が首里方言では「ま」「み」「む」「み」「む」と発音されるといような音対応を示し、そのあとで「^{ゆめ}夢」「^{こよみ}暦」などの単語が首里方言でどう発音されるかを解いてもらい、正解だと実際の首里方言の発音が流れるというような仕組みを作りました。

3番目に作ったのが「日本海のことばと文化」です(写真④)。鳥根県松江市での展示に向けて作ったもので、日



写真② 方言の世界

本海沿岸地域に分布する特徴を集めています。たとえば、松本清張の小説『砂の器』で犯人捜しのキーになっているのがズーズー弁です。主人公の刑事は最初、被害者は東北の人という想定で犯人を捜していましたが、じつは出雲の人だったという結末です。そこで、実際に両者がどれほど似ているのかを試してみるような展示作品を作りました。どうしたかということ、青森の人の「^{しし}獅子」「^{すす}煤」「^{ちず}地図」「^{ちし}知事」等の発音を録音し、一つずつランダムにどちらかの音声を流します。見学者はそれを聞いて、青森の人の発音か、出雲の人の発音かを当てるといったクイズです。出雲の人も結構、間違えていたのが印象的でした。

今年(2019年)は国連が運営する「国際先住民族言語年」です。50年後、100年後に地域のことばを残すために、私たちはいろいろな試みをしています。言語復興やモバイル型展示ユニットに関心のある方、面白いと思われた方は、どうぞ「危機言語・方言プロジェクト」までご連絡ください。

(言語変異研究領域・教授/木部暢子)



写真③ 沖縄のことばと文化



写真④ 日本海のことばと文化

ここまでできた！ 『日本語歴史コーパス』と その活用 ～通時コーパスの構築と 日本語史研究の新展開～

小木曾智信・高田智和

OGISO Toshinobu

TAKADA Tomokazu

日本語歴史コーパスの構築

「通時コーパス」プロジェクト

国立国語研究所の共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」では、上代（奈良時代）から近代（明治・大正時代）までの日本語の歴史を研究するための“通時コーパス”を構築することを目標に、『日本語歴史コーパス』（CHJ: Corpus of Historical Japanese）と名付けたコーパスの整備を進めています。デジタル時代における日本語史研究の基礎資料として研究者に使われるインフラとなるように、また、広く海外の研究者や専門外の方にも使っていただけるように、インターネット上で無償で提供しています。このコーパスは全ての文章

に単語の情報が付けられているのが特長で、高度な検索や集計が可能になっています。これによって、従来は、紙の本を使って行われてきた研究方法を大幅に効率化させるだけでなく、統計的な手法を含む新しい方法による研究が実現しつつあります。

2009年から前身となるプロジェクト（「通時コーパスの設計」リーダー：近藤泰弘、田中牧郎）で準備が進められていたこともあり、構築は順調に進んでおり、2016年からの3年間で表の☑で示した資料群（サブコーパス）を整備し公開することができました。毎年2～3のサブコーパスの公開を進めており、残り3年の計画期間中に、表の全てのサブコーパスの構築・公開を行う予

定です。

公開済みのサブコーパス

CHJは、まだ一部の重要な資料が構築中であるものの、すでに奈良時代から明治・大正時代までの各時代をおおよそカバーできるところまでできており、多くの研究者に使われるようになってきました。すでに、次に示す作品・資料が公開されています。主として、これまでの研究で重視されてきた当時の口語を反映する資料から整備を進めています。今後できるだけジャンルの幅を広げていきたいと考えています。

- 奈良時代編 I 万葉集 約10万語
- 平安時代編 源氏物語等16作品、約100万語
- 鎌倉時代編 I 説話・随筆 今昔物語集・徒然草等5作品、約71万語
- 鎌倉時代編 II 日記・紀行 とはざがたり・十六夜日記等5作品、約11万語
- 和歌集編 八代集、約26万語
- 室町時代編 I 狂言 虎明本狂言集、約24万語
- 室町時代編 II キリシタン資料 天草版平家物語・伊曾保物語、約14万語

表：『日本語歴史コーパス』所収資料（2019.3）

奈良時代	<input checked="" type="checkbox"/> 万葉集 <input type="checkbox"/> 宣命	
平安時代	<input checked="" type="checkbox"/> 仮名文学	<input checked="" type="checkbox"/> 和歌
鎌倉時代	<input checked="" type="checkbox"/> 説話・随筆 <input checked="" type="checkbox"/> 日記・紀行 <input type="checkbox"/> 軍記	
室町時代	<input checked="" type="checkbox"/> 狂言 <input checked="" type="checkbox"/> キリシタン資料	
江戸時代	<input checked="" type="checkbox"/> 洒落本 <input checked="" type="checkbox"/> 人情本 <input type="checkbox"/> 近松	
明治・大正	<input checked="" type="checkbox"/> 雑誌 <input checked="" type="checkbox"/> 教科書 <input type="checkbox"/> 文学作品 <input type="checkbox"/> 新聞 <input checked="" type="checkbox"/> 明治初期口語資料	

国語研とオックスフォード大学

2018年9月8日、9日の二日間、国立国語研究所で「NINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウム」が開催されました。

国立国語研究所とオックスフォード大学人文科学部は学術交流協定を結んでおり、先方の日本語研究センター長を務めたビャーク・フレレスビグ教授は、VSARPJ プロジェクト (<http://vsarpj.orinst.ox.ac.uk/>) のリーダーとして、2011年より『オックスフォード上代日本語コーパス』(OCOJ) の構築を主導してきました。このコーパスは国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』とほぼ同時期に構築作業をはじめ、二つのプロジェクトは共同しながらそれぞれのコーパスの構築と、コーパスを活用した研究を行ってきたのです。

この二日間のシンポジウムは、「通時コーパスに基づく日本語文法研究」と

題して、これらの二つのコーパスを活用した研究成果を発表する機会となりました。「ノとガ、連体・終止形の合一、係り結び、疑問文」を中心テーマとして、二日間にわたり、二つの基調講演と10件の口頭発表が行われました。

国語研とオックスフォード大学は、2012年にも「通時コーパスと日本語史研究」をテーマとして国際シンポジウムを行っていますが、当時は通時コーパスの整備が十分でなかったため、コーパスの構築に関する発表や限られたコーパスを利用した研究が中心でした。それに対し、今回は、充実してきた通時コーパスを活用した研究が、共通のテーマのもとに展開され、コーパスを活用する日本語史研究者の国際的な交流の場となりました。

『オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス』

ビャーク・フレレスビグ教授の基調講演は、“The Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese”と題して、このコー

パスの概要と活用事例を紹介するものでした。このコーパスは国語研との共同研究によりOCOJにさらに整備を加えたもので、今年より『オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス』(ONCOJ)と改称して国立国語研究所から公開されています (<http://oncoj.ninjal.ac.jp/>)。

ONCOJは、『万葉集』を中心とする上代日本語資料の統語情報付きのコーパスです。国語研の『日本語歴史コーパス』が上代から近代までの通時的な研究に主眼を置き、単語の情報を付与したものであるのに対して、ONCOJは上代語に特化し、単語情報だけで

なく文法に関わる情報が付与されているのが特長です。今回のシンポジウムのうち3件の発表はこのコーパスを利用したものでした。

『日本語歴史コーパス』を使った研究

『日本語歴史コーパス』を活用した研究発表もたくさん行われました。大阪大学の金水敏教授(国立国語研究所客員教授)の講演は、「平安・鎌倉時代における連体形の機能変化」。12世紀~14世紀に述語の終止形が衰退し、連体形がその機能を吸収して今日に至るとされる日本語の文法史上の大きな変化について、『日本語歴史コーパス』を使って連体形述語の機能がどのように変化したかを計量的に調査した研究です。

このほかにも、上代から中世・近世にわたって、係り結び・疑問文等に関する7件の研究発表が行われ、活発に議論が交わされました。

通時コーパスが充実してきたことで、今後コーパスを活用した日本語の歴史研究がますます盛んになることが期待されます。

(言語変化研究領域・教授/小木曾智信)



合同の国際シンポジウムのポスター



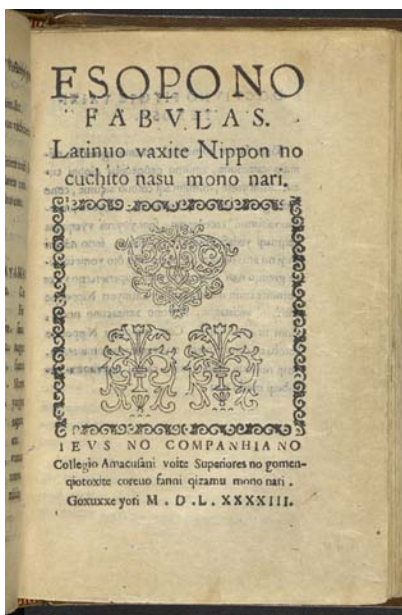
上代語に関する研究発表

天下の孤本

天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』は、16世紀の日本を訪れたキリスト教宣教師の日本語学習向けに編集された読本（リーダー）です。ヨーロッパの印刷機を持ち込み、1592～1593年に九州・天草で印刷されました。ザビエルがキリスト教を伝えてから約40年後、江戸幕府が開かれる10年前のことです。

天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』は、ロンドンの大英図書館が所蔵する1点（Shelfmark: Or.59.aa.1）しか見つかっていません。「天下の孤本」と呼ばれ、貴重な本です。また、日本に伝来した西洋印刷術（活字印刷）による草創期の印刷物であるため、印刷史の観点からも注目される本です。

大英図書館に天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』があることは、明治時代から日本でも知られるようになり、日本語史の研究者にも注目されてきました。なぜなら、口語体で文章が書かれているため、室町時代の日本語の話し言葉を知ることができたからです。天草版『平家物語』『伊曾保物語』



天草版『伊曾保物語』(イソップ物語)

『金句集』は、日本語史研究に多くの知見をもたらしてきました。

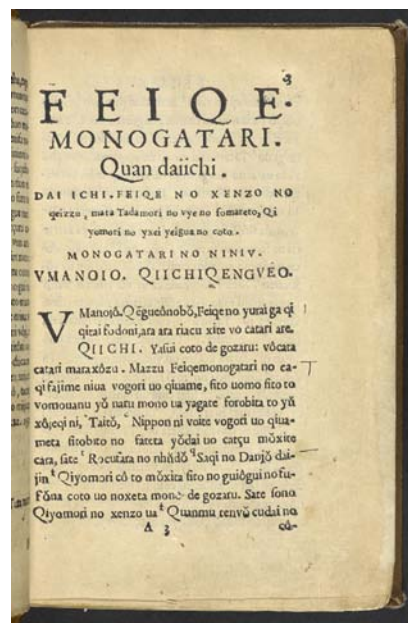
当時の日本語の発音がわかる 画期的資料

また、天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』は、ポルトガル語式のローマ字で書かれています。「Feiqe (平家)」「Nifon (日本)」のように、ハ行の子音は“h”ではなく“f”が使われています。このことから、当時の日本語のハ行音は「ファ・フィ・フ・フェ・フォ」に近い音であったことがわかります。現代の共通日本語では発音を区別しない「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」も、“ji”と“gi”、“zu”と“zzu”のように書かれ、発音に区別があったことがわかります。

このように、天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』は、中世日本語を知る一級資料として、日本語史研究において重要視されてきました。そのため、『日本語歴史コーパス』にも、天草版『平家物語』『伊曾保物語』を収録しました（2018年3月公開、『金句集』は準備中）。

カラー画像の公開

多くの先人たちの手により、天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』は、写真版が公刊され、翻字本文や索引も出版され、研究環境を充実させてきました。しかし、写真は白黒で裏写りもあり、精密な判読を行う上で限界もありました。さらなる研究環境の向上を決意された大英図書館の協力により、2019年3月、カラー画像（JPEG形式）の公開が実現しました。大英図書館提供の画像はパブリックドメインとして公開しています。



天草版『平家物語』

▼大英図書館蔵天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』画像

https://dglb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa/

天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』は、3作品が1冊に装丁され（『金句集』の後に「言葉の和らげ」「難語句解」が続く）、書誌解説では「三部合綴」「合冊」などと表現されてきました。このサイトでは、表紙から裏表紙まで、白紙の遊び紙も含めて、順番に1ページずつ並べ、また、サムネイル画像は本の見開きになるようにし、大英図書館本の現在の姿をある程度実感できるようにしました。

画像公開にあわせて、『日本語歴史コーパス』もアップデートし、「中納言」の検索結果から、検索語の掲載ページの画像を閲覧できるように、リンクを設けました。

なお、より高画質の画像（TIFF形式）を希望する場合は、大英図書館から有償で提供を受けることができます（<https://www.bl.uk/digitisation-services/ordering-images>）。

（言語変化研究領域・准教授／高田智和）

日本語文法って 楽しくない？ 不思議クナイ？

茂木俊伸 MOGI Toshinobu

夏休み。自由研究のために池でトンボの観察をしていた娘が言った。

「(今のトンボより)糸トンボの交尾の方が長かったくない？」

父は思った。

「とうとう来たか……」

トンボが、ではない、「クナイ？」が、である。

そう。父は「長くない?」「できなくない?」のような言い方はするが、「ク」はあくまでも形容詞や助動詞の一部(活用語尾)であって、形容詞の過去形(タ形)「長かった」に「クナイ?」を付けられるという感覚は持っていない。勤め先の学生が使っているのを何度か聞いて気にはなっていたが、いまや小学生も使うのか。

「周りの子も『長かったくない?』って言うの?」

「え? 言うくない?」

おお、動詞「言う」にも付くのか。なんだか楽しくなってきたぞ。

この「クナイ?」(よりくだけると「クネ?」)の形は、元々は「長くない?」のような形容詞型の否定疑問形に由来すると考えられる。それが動詞に付いて「できるクナイ?」のような新しい形を作り出しているという現象は、高木(2009)や平塚(2009)で報告・分析されている。だいたい娘が生まれた頃の研究である。

これらの先行研究からポイントを簡単にまとめると、おおよそ、次のようになる。

- 1) この「クナイ?」は、〈同意要求〉を表すひとかたまりの文末表現である。
- 2) 「ン」のような否定形を使う方言で「動詞否定形+クナイ?」(例:できんクナイ?)が成立。さらに「クナイ?」がかたまりとして意識されて独立、付く対象を拡大し、「動詞肯定形+クナイ?」(例:できるクナイ?)のような形が生まれた。
- 3) 「クナイ?」は状態を表す述語(否定、可能の形や状態を表す動詞)に付きやすい。

なるほど。確かにこの「クナイ?」がしているのは、直前の「こう思うんだけど」という自分の意見に対して、聞き手に「うん、そうだね」のような同意を求めることである。

このような新しい表現は、文法規則を“壊す”ものと捉える人もいるが、既存の規則をベースに成立していることが多い。例えば、動詞「違う」を「ちがくて」「ちがかった」のように活用させる例も、形容詞型の活用語尾が変則的に現れる現象として知られるが、「違う」が(形容詞と同様に)意味的に“状態”を表すことと関係があるとされる。

よし。状態を表す形なら「クナイ?」が付くのか、試してみよう。直感的に次のようないくつかの形を作ってSNS上で検索してみると、実例が見つかる見つかる。

- (1) ちょっと無理くない?
[形容動詞(語幹)+クナイ?]
- (2) 常識的に分かるくない?
[動詞(肯定形)+クナイ?]
- (3) あの人と似てるくない?
[動詞(テイル形)+クナイ?]
- (4) トイレのドアが開かない。これ詰んだくない?
[動詞(タ形)+クナイ?]

(1)の「無理(だ)」は、状態を表す品詞である形容動詞の例である。(2)~(4)の動詞は、「分かる」「似ている」は恒常的な状態(能力や属性)を表す例、「詰んだ」(“打つ手がない”の意)は一時的な状態を表す例としてセレクションしてみたものである。娘が使っていた「長かった」は過去の状態だし、「言う」(“そのような言い方をする”の意)も習慣を表すから状態と言えなくもない。よし、理屈が分かれば、なんだか父も「クナイ?」を使えるような気がしてきたぞ。



新しい「クナイ?」はこうしてできる

イラスト 鈴木祐里

若者が使う「クナイ?」がどこまで広がるのかに関しては、上のような前接語の広がりだけでなく、地域的な広がりも興味深い。

先行研究では、「動詞肯定形+クナイ?」は関西方言や福岡市方言では見られるが、首都圏にはまだ進出していないとされていた。しかし、関東在住の先輩研究者が身の回りで調べてくれたところによると、2018年の段階では、(1)~(4)のような「クナイ?」を見聞きし、自分でも使う高校生・大学生が一定数いるようである。

このように、日本語の文法規則は、知らないうちに変化のきざしを見せ、いつの間にかその変化が定着していることがある。使っている若者自身も、意識しないうちに。

文法研究者をしていて楽しいのは、このような現象にいち早く気付けること、そして先行研究の助けを借りながら、理屈を足してあれこれと考えられることで

ある。どのような形が可能なのか。なぜ変化するのか。調べてみたいことはどんどん出てくるが、現象の全体像を捉えるための設計はなかなか難しい。

父の自由研究は、(勝手に)始まったばかりなのであった。

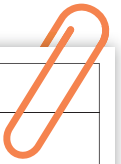
参考文献:

高木千恵(2009)「関西若年層の用いる同意要求の文末形式クナイについて」『日本語の研究』5(4), pp.1-15, 日本語学会.

平塚雄亮(2009)「動詞肯定形に接続する同意要求表現クナイ(力)」『日本語文法』9(1), pp.71-87, 日本語文法学会.



もぎ としのぶ ● 熊本大学大学院人文社会科学部准教授。日常生活の日本語の“不思議”を探し、その分析に「ねえ、この表現なんだけど気にならない?」と周りを巻き込むことを喜びとする文法研究者。Twitter ID: @tmogi_nichibun



研究者紹介 012

横山 詔一

言語変化研究領域 教授

受注生産方式の研究スタイルも悪くない。

よこやま しょういち ●1959年愛媛県生まれ。今でも頭の中では伊予弁で考えている時間のほうが長い。関西人ゆえ、学会発表や大学の講義では大いに笑ってもらいたいのだが、誰も笑ってくれない。社会言語科学会優秀論文賞（徳川賞）、日本教育工学会論文賞などを受賞。

— 研究の道に進んだきっかけは？

不純な動機です。高校卒業までは「現代国語が好きじゃけん、大学を出たら中学校か高校の国語の先生になりたいのお。ほんで愛媛でノンビリ暮らすんじゃ」と考えていました。また、中学生のころから心理学にも興味があったので、横浜国立大学教育学部の心理学科に進学しました。

大学に入学して最初のオリエンテーションで、心理学科の先生が、クラス全員に「大学院に進学して心理学者になることを目指さない」と強くすすめてくださいました。その時に「心理学者になれたらカッコええきん、とりあえず目指してみよわい」と思ったのが、研究の道に進んだきっかけです。

— 研究のザックリとした履歴を。

大学院を1985年3月に出て、4月に上越教育大学に専任助手（学習心理学担当）として着任しました。その修士院生の一人が、単語の表記と記憶の関係について心理実験を行っているのを見て興味を覚え、一緒に研究させてもらいました。その結果、査読誌に論文が数本掲載され、それが縁で1991年4月に国立国語研究所に移りました。

国立国語研究所では電子計算機システム開発研究室に配属されたのですが、社会言語学の調査に参加する機会にも恵まれました。山形県鶴岡市における「共通語化」の経年調査に1991年の11月に調査員として参加した際は、心理学者がおこなう社会調査よりも格段に方法論がしっかりしていることを身をもって知り、衝撃を受けました。

1996年からは笹原宏之先生（現在は早稲田大学教授）と共同で、「異体字の

好み」に関する研究に取り組みました。笹原先生は2005年3月に早稲田大学に転出され、後任として北海道大学大学院から高田智和氏（現在は国語研准教授）が着任しました。高田先生とは異体字認知についての国際比較研究などを行いました。

2008年に愛知県岡崎市における「敬語と敬語意識」の経年調査に、2011年に山形県鶴岡市の「共通語化」の経年調査に20年ぶりに再度参加しました。それらの調査で収集したデータを解析して『日本語の研究』などの査読誌に投稿し、論文が掲載されました。

— 言語資源という用語の誕生について語りたいことがあるとか？

1992年から当時の水谷修所長が代表者になって超大型プロジェクト「国際社会における日本語についての総合的研究」の研究費を科学研究費補助金（創成的基礎研究）に申請する準備を開始し、1994年4月に5年間のプロジェクトがスタートしました。1992年秋に私は江川清研究部長の指示を受けて申請書の作文を担当することになり、統計数理研究所などと連携しながら申請書の下書きを作りました。

そのときに「言語資源」という新語を提案してみようと思いつき、申請書類に書いたところ、関係者各方面から「聞いたことがない言葉だ」という意見が出て、いったんは削除されそうになりました。

しかし、当時の文化庁国語課長だった蕪澤弘志さんがこの用語の重要性をよく理解しているいろと励ましてくださり、最終的にはプロジェクトの研究班4「情報発信のための言語資源の整備に関する研究」において言語資源の整備を目標

とした研究を行うことになりました（参考：<https://rnr.ninjal.ac.jp/fond.php?fond=fo0059>）。

言語資源という、いまや当たり前になった用語がこの世に誕生する場面に立ち会えたことは、私の誇りの一つです。

— 今後は？

いま関心があるのは、国立国語研究所が2009年3月に発表した「「病院の言葉」を分かりやすくする提案」の経年研究を何らかの方法で実現させることです。「「病院の言葉」を分かりやすくする提案」のすべてを経年的に調査研究することは予算等の関係で不可能なので、規模を縮小したうえでネットによる意識調査などを活用してデータを収集したいと考えています。

今回、自分自身の研究スタイルを振り返って、気が付いたことがあります。それは、自分で積極的にオリジナルなテーマを立てた場合は査読誌に論文が掲載される確率はゼロに近く、受注生産方式で研究を進めた場合は査読誌に論文が掲載される確率が格段にアップするという事実です。つまり、私には研究者としてのセンスがありません。周囲（とくに国語研）の研究者仲間が、私にフィットするよい注文を出してくれるからこそ、なんとか研究者として食べていけるのです。あらためて、周囲のみなさんに感謝を申し上げます。



研究者紹介 013

新永 悠人

言語変異研究領域 特任助教

「琉球語はみなさんを待っている」
このことばに導かれて。

にいなが ゆうと ●1983年神奈川県出身。2015年から成城大学などで非常勤講師。2017年から現職。2018年8月から2019年2月までハワイ大学マノア校にて客員研究員。2007年より琉球諸語記述研究会の運営委員。北琉球の奄美大島（特に湯湾集落）と久高島の方言の研究をしている。

— 研究者になったきっかけは？

高校生か浪人生のときに千野栄一先生（東京外国語大学・チェコ語専門）の『外国語上達法』（あるいは『言語学 私のラブストーリー』かもしれない）を読んで、言語学、とくに音声学に惹かれました。千野先生は言語学のプロとアマチュアを分けるのは音声学（厳密には調音音声学）の知識・技術の有無であって、音声学を身につけたら世界中のどんな言語の発音も可能になると書いていました。それを読み、「ああ、自分は言語学のプロになりたい」と強く思いました。

— 奄美方言の研究を始めたきっかけを教えてください。

大学で音声学を修得し、いざ大学院に進学したのですが、進学後に大きな問題にぶつかりました。言語学を学びたいという強い気持ちはあったのですが、具体的な研究対象が見つかっていなかったのです（進学を許されたのが不思議です）。そんな不安のさなか、沖縄語（首里方言）の研究者である西岡敏先生が夏期集中講義に訪れ、こう言ったのです。「琉球語は若手研究者が少ない。琉球語はみなさんを待っている」。初めは、琉球列島の白地図のどちらが北でどちらが南かも分かっていなかった自分が、西岡先生の言う「みなさん」に含まれるとは考えもしなかったのですが、たまたま一緒に受講していた研究室の先輩（現在はメキシコの大学教員）に私の祖父の出身が奄美大島であることを伝えたところ、「新永君、奄美に行けばいいじゃん」と非常に軽い調子で助言されました。私は「そうは言ってもなあ…」と思っていたのですが、その後、研究室に行くたびに同輩・後輩・先輩たちに「新永君、奄美

に行くんだって？」と聞かれるようになり、次第に「自分はどうやら奄美に行くらしい」と思い始め、結局奄美大島にフィールドワークに行くことになりました。大学院1年目の冬のことでした。

— フィールドワークで印象に残っていることはありますか？

私の父は神戸生まれで、私自身は神奈川県生まれ育ち。父方の祖父以外は奄美以外の出身なので、私は奄美のクウォーターかつ3世です。シマとのつながりはほぼ途絶えていたので、特に知り合いもない状態で初調査に行ったのですが、宿の主人がたまたま祖父の知り合いで、夜にごちそうを用意してくださり、そこで「あなたは私の親戚だよ」と言う方に出会いました。それ以来、楽しい親戚付き合いが続いています。

— ハワイ大学で客員研究員をされたと同いしましたが、ハワイではどのような研究を？

ハワイ大には「人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラム」によって派遣されました。それは同時に、2018年2月に国語研とハワイ大マノア校との間で結ばれたMOU (Memorandum of Understanding) の研究交流の一環でもありました。ハワイ大では少数言語の記録・保存を専門とする研究者の授業を見学したり、相談したりして、自分がこれまで半ば我流で行ってきた北琉球諸方言の研究方法をさらに洗練させる方法を研究し、その成果を2019年1月の国語研・ハワイ大・琉球諸語記述研究会の合同研究会（於ハワイ大マノア校）で発表しました。さらに、大学院生、退官した教員ら5名とともに私の博

士論文（英語で書いた奄美大島湯湾方言の記述文法書）を読む勉強会を毎週2時間ほど行いました。彼らが示してくれた私の研究への興味関心はハワイ滞在中の一番の贈り物でした。ハワイ在住の沖縄系移民の方々の勉強会（「がじまる会」）で自分の研究について講演する機会もいただきました（写真参照）。

— 今はどのようなことにご関心があるのですか？

奄美大島と久高島の方言を研究することは私のライフワークです。これまでは奄美大島宇検村の14集落の1つである湯湾集落の方言を研究して来ましたが、これからは残りの13集落の方言の簡単な文法書・辞書・談話資料を記述・記録して行こうと思います。宇検村と久高島の研究がある程度まとまったら、次は日本手話の研究に関わりたと思っています。なぜ手話？と思うかもしれませんが、私の研究の最も根本的な動機は人間の言語能力の可能性の深さ・広がりを知ることなので、それを知るためには音声言語だけではなく、視覚言語も視野に入れることはものすごく自然なことなのです。



「がじまる会」での講演会

国立国語研究所 オープンハウス 2018

2018年12月20日、国立国語研究所は古希を迎えました! さらに今年の10月1日には、大学共同利用機関に生まれ変わって10周年を迎えます。これらを記念するイベントの一つとして、「国立国語研究所オープンハウス2018」を昨年12月22日に開催いたしました。国語研が70歳になったのを機に行った初めてのオープンハウスで、内心緊張しておりましたが、たくさんの方々が来場してくださいました! 本当にありがとうございました。

研究内容を紹介するポスターは全部で38枚。研究者が1時間ずつ交代でそれぞれの研究内容を説明しました。

見て、聞いて、体験。みなさん熱心にブースを回っていらっしゃいました。

方言に関するモバイル型展示や絵本を楽しむみなさん。

同日開催シンポジウム

「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」
「経年調査の新たな挑戦—日本語の将来を占うために—」

研究図書室見学ツアー
人数限定で行われた大人気のこの見学ツアーでは、普段は見る事ができない閉架書庫や貴重書を公開。みなさん興味津々の様子で見学していらっしゃいました。

放送大学と特別番組を制作しました

放送大学の新しいチャンネル開設に伴う記念企画として、特別番組の共同制作を行いました。「生きた日本語と格闘する 日本語研究70年」(前編・後編各45分)というタイトルで、前編は2018年10月21日から、後編は2019年1月27日から放映されました。前編は国語研が設立時に取り組んでいた研究を、後編は現在取り組んでいる先端の研究を紹介したものです。放映は終了しましたが、今後、研究所内のイベント等でご紹介する予定です。



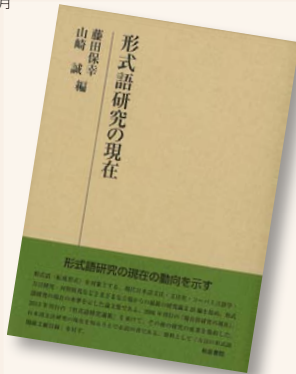
Book Review

著書紹介

形式語研究の現在

藤田保幸・山崎誠 編

和泉書院
2018年5月



「か」からこそ「における」「ものだ」「の」だった」「てしまう」「つもりだ」のように、いわゆる自立語（＝詞）と付属語（＝辞）が結びついて一つの複合的な形式を成すものは、「複合辞」と呼ばれるが、本書はこれらに加え、「頃」や「分」のように、単独で辞的に転成した形式も含めて「形式語」と呼ぶ。

形式語研究は、現在の言語研究のキーワードである「文法化」と深く関わるものであり、本書には、現代語のみならず古典語・方言・対照研究・日本語教育・言語接触など、多彩な分野からの形式語研究が集められている。近年、盛んに行われている多分野の交流（コラボ）と相互活性化を目

指した複合的研究書でもある。

本書は、論文28編と文献目録1編（方言の形式語関係文献目録）を収め、『複合辞研究の現在』（2006年）に続き、藤田・山崎両氏によって編集されている。文法カテゴリーで述べれば、格・ボイス・アスペクト・テンス・モダリティ・主題・取り立て・複文・接続詞・感動詞・敬語など、あらゆる項目にわたる研究を見出すことができる本書は、おそらくどのような分野の日本語研究者が手にしても、自身の研究テーマと深く関わる刺激的な論考を見つけれらるのではないだろうか。

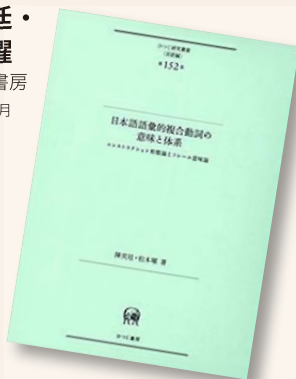
▶前田直子(学習院大学)

日本語語彙的複合動詞の意味と体系

コンストラクション形態論とフレーム意味論

陳奕廷・松本曜

ひつじ書房
2018年2月



「放り投げる」は「放る+投げる」、「食歩く」は「食べる+歩く」、「寝そべる」は「寝る+そべる」だろうか？ 本書は、日本語に三千以上存在する（語彙的）複合動詞を認知言語学の観点から包括的・体系的に考え直す意欲作であり、二つの意味で「 $1 + 1 \neq 2$ 」を実証している。

第一に、本書は姉妹理論である「構文文法」と「フレーム意味論」の相乗効果を示すことに成功している。Charles Fillmore氏を中心に発展してきた両理論は、40年ほどの歴史を有するものの、その相補性をここまで明確な形で例証した研究は稀である。特に、語レベルの構文文法である「コンストラクション形態論」については、国

内初の概説となる。

第二に、本書は両理論を駆使することで、複合動詞が動詞と動詞の足し合わせだけでは説明しきれないことを主張する。複合動詞は日本語研究の一大テーマであり、これまで多くの研究者がその足し算の方法を論じてきた。しかし、「食歩く」が独特な移動経路を表すことや、「寝そべる」の「そべる」が単独では使われないことからわかるように、そのような足し算には問題がある。本書が提示する解法には、複合動詞研究にとどまらないヒラメキがある。

▶秋田喜美(名古屋大学)

小学生から身につけたい 一生役立つ語彙力の育て方

石黒圭・柏野和佳子

KADOKAWA
2018年10月



「語彙力」を冠した一般書が書店で目につくようになったのは、2015～16年頃。その主流は、社会人としての口の利き方を伝授するたぐいのハウツー本で、「これで『語彙力』は大げさでは」と思うものもあります。そんな中、本書の著者のひとり石黒圭さんの『語彙力を鍛える』（光文社新書）は、語レベルの表現の問題全般を論じた、真正の表現概論でした。

ただ、読者の中には、もっと実践的な問題集がほしいと思った人もいたかもしれない。その期待に応えるのが、さしずめ、本書『一生役立つ語彙力の育て方』です。

本書は、それこそ、語レベルの表現全般にかかわる43種の練習問題を用意し、そ

れぞれに丁寧な解説をつけています。柏野さん担当の前半では、「遊ぶ」を国語辞典ふうの説明せよ」といった、辞書編纂者養成系の問題が並んでいて、「なるほど、これならトレーニングになる」と、分かりみが深い。石黒さん担当の後半では、「今の体重がやばい」を普通のことばに言い換えよ」など、ユーモアも含んだ石黒メソッドの問題が続きます。

自分だけでなく、周囲の人にもやらせたい問題が満載。学校の先生は、本書を基に、自分なりの問題を作ってみるのもいいでしょう。

▶飯間浩明(国語辞典編纂者)

編集後記

『ことばの波止場』第5号をお届けします。

今回の記事を皆さんよりも一足先に読みながら、本来目に見ることができない言語というものの不思議さをあらためて感じました。

私たちの脳の中にあり、それでいて社会の中で共有されている言語は、本来は目に見えないものです。それが文字を通して記録された時、また分析されて文法書や辞書としてまとめられた時に、それは見えるものになり、時代を超えて共有されるようになります。それを研究者が研究しているうちにも、言語はいつの間にか見えない形で姿を変え、研究者は再びそれを追うこととなります。そして研究者は言語を目に見える形で社会に提示します。

『波止場』の第5号で紹介されている研究活動は、この目に見えないものに取り組む研究者の活動と言えるでしょう。言語研究の難しさも面白さも、この「目に見えない」という性質と関係しているように思えてなりません。このような地道な言語研究の意義がさらに認知されていくことを願います。この情報誌がそれに貢献することとなれば幸いです。

表紙の写真は、放送大学と共同で製作した特別番組「生きた日本語と格闘する 日本語研究70年」の撮影風景です。これについては14ページを御覧ください。

(松本曜)

次号予告

研究プロジェクト 紹介②

対照言語学と音声言語

国語研

ことばの波止場

vol.5

平成31(2019)年3月29日発行

編集 国立国語研究所研究情報誌編集委員会

発行 大学共同利用機関法人
人間文化研究機構
国立国語研究所
〒190-8561
東京都立川市緑町10-2
電話042-540-4300(代表)

協力 くろしお出版

デザイン 黒岩二三[Fomalhaut]

無断転載を禁じます

©2019 National Institute for Japanese Language and Linguistics